



白馬の王子さま



anotherwork

ば、僕はね、馬に乗って学校に行きたいんだ」とノボルくんは言った。私は思わず「ウマ？」と聞き返してしまった。聞き間違いをしたに違いないと思ったのだ。ところが、ノボルくんは本気だった。

「し、白い馬に乗ってさ、みんなが驚くのを横目に、さっ爽と学校まで行くのさ。」

ノボルくんが得意げにそう言い終わると、私はすぐに笑ってごまかした。一体なんていい返しすべきなのよ、誰か私に教えて、と大声で叫びたかった。そもそも、一体何がノボルくんにそんな野望を抱かせたのだろうか。私にはさっぱり分からない。しかも、ノボルくんはとっても真剣に話すのだ。私にとって、（ノボルくんにはとても正面きって言えないが）こんな変な人は初めてだ。

「ねえ、どうしてそんなことしたいの？」私はさりげなく笑顔で訊いてみる。

「うふふふ。」彼は、何か怪しげに笑った。「実はね。夢で見たのさ。」

「ねえ、どんな夢なのよ？」私はさらに追及してみた。

「お、教えられないな。」

「どうしてよ？」

「約束したのさ。」

「誰と？」

「うふふふ。それは秘密。」ノボルくんは、再び怪しげに微笑んだ。

私にとって、そんなことはどうでもいいことだった。きっとヘンテコな約束に違いないと見切っていたからだ。だけど、どうしても訊きたくなっちゃったのは、それは、とてつもないほどヘンテコなことで、つまり、とってもオモシロイはずだ、と私は考えたからだった。私はおもしろいことが大好きだ。それよりも、おいしいものを食べるのが大好きだけど、その次にオモシロイことが大好きなのだ。何かおいしいものを食べながらバカみたいに笑えたら、とっても幸せだと私は思う。よく私は人から、「もっと真剣に考えなよ。」とか「人間として成長してないね。」とか言われる。ひどいときなんか「きみ、教養というものが全く欠けとるね。」とか「もしかして、きみっておばかさん？」と言われるときがある。そう言ってくるのは、決まってインテリぶったヤツかキザなヤロウに決まっているが、私はそういう人種が本当に嫌いだ。もしも、私が大統領になったら、絶対にアウシュビッツ収容所みたいのを造って、あんな奴らをみんな捕まえて、それから石鹼にしてやろうかと思っている。でも、ノボルくんだけは絶対に収容しないだ

ろう。ノボルくんは、ヘンテコであるがゆえにオモシロイ。私がひどい点数のテストで落ち込んでいても、彼氏とケンカしても、おいしいものを妹に食べられても、ノボルくんのヘンテコ話をきいてくるうちに私は元気になれる。そういう意味で、私にとって彼は貴重な存在なのだ。

「ねえ。」私は言った。「フルート弾いてあげるから、教えてちょうだいな。」

ノボルくんはなぜか楽器というものに弱い。ノボルくんは楽器というものを聴いているうちに、まるで催眠術をかけられているみたいに目がトロンとしてきて、なんでも言うことをきいてくれるのだ。ちなみに私は吹奏楽部に所属していて、フルートを担当している。私がフルートを引き始めると、ノボルくんはゆっくりと話しはじめた。

「実は、その夢の中に出てきたのは、ユニコーンだったんだ。あの、白くてぴかぴかと青く光って角が生えてるやつさ。ユニコーンは、僕にこう言ったんだ。

『私は、あなたの願いを一つだけきいてあげよう。』

ぼくは、しばらくいろいろと悩んだあげくに、朝、学校まで乗っけてってほしいって言ったんだ。そしたら、ユニコーンはちょっと困惑して、それはできないな、と言ったんだ。僕は、どうして？とたずねると、朝の太陽がのぼってくるような明るいときは駄目だって言うんだ。それで、しょうがなく夜でいいって言ったのさ。そしたら、今は夜だからすぐに乗れと言って、僕を学校まで乗っけていってくれたんだ。そりゃ、すごかったよ、なにせ一瞬で空に浮かんだかと思ったら、すごいスピードで学校まで着いちゃったんだ。僕はユニコーンに礼を言った。そして、こんどモモコちゃんもいっしょに連れていきたいって頼んでみたんだ。ユニコーンはまたしかめっ面になって、それはできないな、と言った。僕は、なぜって訊くと、その子とは、トモダチじゃないからって言うんだ。僕は言ってやったよ。モモコちゃんは、僕のいところで、とってもやさしい人だって。そうして、僕はひとりぼっちだから、モモコちゃんのお母さんが心配してくれて、僕に夕食を食べさせてくれているんだって。だから、モモコちゃんはきっと君ともトモダチになれるよって。そうしたら、ユニコーンのやつ、黙りこくっちゃって、ちょっと考えさせてくれって言うんだ。一週間ぐらいで返事をするから、それまでこのことは内緒で頼むってね。それで僕は、モモコちゃんにこのことをしゃべれなかったんだ。ごめんよ。ほんとにごめん。僕は本当にモモコちゃんには何でも話したいと思っているんだ。本当だよ。ユニコーンに誓うよ。」

意識を半分うしないそうになりながら、ノボルくんはそう話したのだった。「やっぱし、へんじゃん」と私は笑いながら聞いていたが、最後の方は、なにかグッとくるものがあった。それが、何なのか私には分からない。と、そんなところに、お母さんが二階から降りてきた。

「あら、寝ちゃったの？ノボルくんにしては珍しいわね。」とお母さんは言った。「そうよ、私は、こうして勉強していたのに、ノボルったら、寝ちゃったのよ。」と私は嘘をついた。本当は食事を終えた後、私が勉強をしているノボルくんに話しかけて邪魔していたのだった。

「そう。きっと、疲れているのね。」お母さんは心配そうである。「そんなことないと思うわ。」と私は言った。母は、どうして私よりノボルくんの心配ばかりするのだろうか？確かにノボルくんは高校生であるにもかかわらず、ひとりぼっちで生活している。でも、だからって何も私のお母さんをとらなくてもいいのではないか。

「モモコ、黙ってみていないで、あんたは、二階にいて勉強しなさい。ノボルくんが起きたらどうするの、ほら、早く早く。」

お母さんはそう言って、私をせかす。私はノボルくんのが憎たらしくなって、みつからない

ように彼の腕をそっとつねった。

「イタ、イタイ」彼は、飛び起きるなりそう言った。「レディのまえで寝るなんて失礼よ。」私は言った。ノボルくんはよく状況が呑み込めないらしく、キョロキョロしていた。そのすきに私はさっと起き上がり、二階へと上がっていった。こうなれば、逃げるが勝ちだ。しばらくして、彼がフルートのことを告げ口したらしく、お母さんが怒鳴って私の名を叫んでいるのが聞こえてきた。

「モモコ、モモコ！ちょっとお母さん、あなたにお話があるの。降りてきなさい。モモコ、モモコ！」

私は、部屋に鍵をかけ、電気を消す。そして、ベットにもぐりこんで寝たふりをする。

今日は、どんな夢をみるだろう？もしかして、私の夢にもユニコーンが出てくるかもしれない。もし、でてきたらどうしよう。私は、ユニコーンとトモダチになれるのだろうか……。

その夜、私の夢には信じられないことに、ユニコーンが現れた。ユニコーンはノボルくんの言ったとおりに白くて青い光を放っていた。そして、額には銀色の鋭い角が生えており、その体からは白い大きな翼がついていた。私は嬉しくてたまらず、ユニコーンに近づいて行った。

「こんにちは。」私は得意の愛嬌でそう話しかけた。ところが、ユニコーンは何やらムスツとして返事もしなかった。

「私はモモコ。あなたはユニコーンでしょう？」

それでもユニコーンは眉間に皺をよせて何かをじっと考え込んでいるようだった。私は何とかユニコーンの気を引こうと必死に話しかけた。

「ノボルくんからあなたのことを聞いたの。あなた空を飛べるんでしょう？」

すると、ユニコーンは憂鬱そうな顔をこちらにむけて、「君は、ノボルとトモダチなのか？」と言った。

「もち、そうよ。ノボルは毎日うちに夕食を食べにくるわ。」と私は答えた。

すると、ユニコーンはまたしかめっ面をして、「君は、ノボルのことを信じているのかい？」と真剣に訊ねた。

「信じる？」と私は聞き返した。

「ノボルの言うことを信じているかい？」ユニコーンは言った。

「まあ、そりゃおもしろいし。」と私は答えた。ユニコーンは、がっくりと肩を落とした。そして、また憂鬱そうな顔をして何かを考え始めた。

「それがどうしたのよ。」と私は言った。「早く、私もあなたに乗せてちょうだい。そして、どこでもいいから空を飛んでみたいわ。」

「嫌だね。」とユニコーンはそっけなく答えた。「君とはトモダチになれない。」

「どうしてよ。」と私は頭にきて言った。「あなた、ちょっと生意気よ。だいたいあなたなんて空想の動物じゃない。それに、これは私の夢よ。だから、私の好きなようにしてもいいはずよ。」

ユニコーンはこっちをじっと睨んでいた。私は興奮して言った。

「早く、早く私を乗せて空を飛んでよ。ノボルだけ乗せて、私を乗せてくれないなんてひどいじゃない。」

ユニコーンは首を振って言った。「ノボルは僕のトモダチだけど、君はトモダチじゃない。」

「どうしてよ。」私はさらに興奮して言った。「どうしてノボルとトモダチになれて私にはトモダチになれないのよ。」

ユニコーンは、またこちらをじっと睨んでいた。そして言った。「君は僕のことを信じていないだろう。僕のことをたまたま夢に出てきた幻想の動物だと思っているだろう。」

「まさにそうじゃない。何言ってるのよ。」と私は口をとがらせて言ってやった。

「でも、僕は本当に実在する。ノボルは僕がここにいることを信じてくれるから、トモダチなんだ。」

「何よ。そんなのへ理屈じゃない。このインチキ馬！！」私は怒鳴った。ユニコーンはそんな私をじっと見ていた。その目は、とても哀しそうな目だった。

「君がそこまで言うのなら」ユニコーンは静かに言った。「明日の夜八時、中学校のとなりにある馬小屋まで来てごらん。そうすれば、僕が本当に実在することが君にも分かるはずだから。」

ユニコーンはそう言って、だんだんと透明になっていった。そして、それはだんだんと光り輝いて、まぶしくてまぶしくて仕方がないほどになっていった。

「何やっているのよ。早く起きなさい。学校に遅れちゃうわよ」私はそんなお母さんの声で目覚めた。

「ユ、ユニコーンが……。」

「何寝ぼけてるのよ。早くしないと、学校に遅れちゃうんだから。」

「でも、ユニコーンが……。」

「もう、早くしなさい！！」お母さんはとうとうぶちキレた。私はいそいそとベッドを抜け出て、顔を洗いにいった。あの夢は一体何だったのだろうか？本当にユニコーンはあるのだろうか。いや、いるはずがない。あれは単なる夢だったのだ。私はそう思っていつものように顔を洗い、歯を磨き、朝食を食べ、学校へと出掛けていった。

学校にいる間、私の頭にはユニコーンの言ったことについて考えていた。

「明日の夜八時に中学校のとなりにある馬小屋まで来てごらん。」

考えてみれば、確かに中学校の近くに馬小屋はあった。正確にいうと隣ではなくて、南に歩いて十分もしたところに古ぼけた馬小屋があった。確かにそこには馬がいて、かつて私は学校帰りに給食で残したニンジンを食べさせたことがあった。だが、その馬はやせ細った貧乏くさいごく普通の馬で、とてもユニコーンには似ても似つかなかった。そんなところに行って本当にユニコーンに会えるのだろうか？

「じゃあ、ヤグチ・モモコさん、答えてくれますか？」ふいに誰かが私のことを呼んでいるのが耳に入った。気がつくと、クラスみんなが私を見ていて、教壇に立っている青山先生もニコニコしながらこっちの方を見ている。

「キヨギよ。キヨギ。」隣に座っている親友のミワは必死に私にそう教えていた。

「キヨギ？」私は聞き返した。「キヨギって何よ。」

「だから、その漢字の読み方よ。ほらこれよ。虚偽。」

「なるほど。先生、キヨギです。キヨギ。」

「そうですね。虚偽です。」青山先生は満足そうにそう言って、伊藤整という作家の書いたエッセイ「近代日本における愛の虚偽」について、何やら話していた。

「つまり、西洋人の愛の観念というのは、宗教というものがちりと結びついたものなのだけれど、われわれ日本人の愛の観念にはそれがない。それゆえ……。」

青山先生は、いつも教科書を放り投げて、「愛」について語っている。私はそんな青山先生の型破りの授業が大好きだ。だが、先生はいつも憂鬱そうな顔で「愛」について語っている。その顔は、まるで夢にでてきたムスツとしたユニコーンのようだ。

「ユニコーンか……。」私はつぶやいた。「まあ、とにかく行ってみるとするか。おもしろそうだし。」

その日、学校から帰ってきた私は、すぐにお母さんに夢のことを話した。お母さんは、笑っていた。

「じゃあ、行ってきなさいよ。」

「本当にいいの？」お母さんが夜に出掛けるのを許すのはめずらしい。

「その代わりに、ノボルくんについていってもらおうのよ。夜に女の子一人で歩くのは危ないから。」

「分かっているわよ。連れていけばいいんでしょう？」

夕方になると、いつものようにノボルくんはオンボロ自転車に乗ってやってきた。彼は今日、私がユニコーンに会いに行くことを知らない。私はノボルくんに急いで夕食を食べさせ、そして何も言わずに外に連れ出した。

「ど、どこへ行くんだよ。」ノボルくんはおどおどして言った。

「黙ってついてくればいいの。」私は強引にノボルくんを引っ張って歩き出した。私の家から中学校までは、約三十分ほどで着ける。曲がりくねった坂道をひたすら上っていくとたどり着けるようになっている。途中にあるのは民家だけで、わずかにある商店はもうすでに閉まっている。周囲にはあまり人影が見当たらず、夜になればなるほど辺りはしんと静まりかえる。なんだかちょっとあぶない感じがする、と私は思った。ところが、ノボルくんはそんなことを全く気にしないようで、馬小屋までたどりつくまでずっとユニコーンのことを話していた。

「ユニコーンはね、いつも一人きりでいるけれど、本当はとても淋しやがりなんだ。それなのに、ユニコーンたら、一人でいるのが好きなんだとか、一人きりでいるのが僕に合っているとかがっていつも一人きりでいるんだよ。だから、僕はそんなユニコーンがいじらしくなって、ときどき遊びに行くんだ。すると、ユニコーンたら、本当は嬉しいのにさ、君がいなければ僕は聖書をじっくりと読むことができたのに、とか言うんだよ。ほんと、素直じゃないやつでさ、どうしようもなく頑固なやつなんだよ。え？そんなユニコーンと仲良くするのって大変だろうって？そりゃあそうさ。ユニコーンたら短気で、自分のプライドを傷つけそうなことを言うとすぐ怒るんだもの。僕は何度もあの鋭い角にどつかれそうになったか分からないよ。でも、それもなんとなくしょうがいことかもしれないって、最近思っているんだ。ユニコーンだって僕たち人間といっしょで、何かどうしようもなく嫌なことや傷ついたことがあって、ああなってしまったと思うんだよ。え？何がユニコーンにあったかって？そんなことは僕は知らないよ。何となくそう思うだけだから。ただ、きっと人間を信じられなくなるようなことがたくさんあったんじゃないかって思うだけだよ。」

私たちは坂の上をさらに上がっていった。日はだんだんとくれていって、本当に真っ暗になっていった。周りは明かりのついた民家がまばらにあるだけで、街灯もほとんどない。私は歩きながらだんだんと恐ろしくなっていた。ノボルくんは、そんなことは気にしていないようで、さらにしゃべり続けていた。

「そういえば、この間ユニコーンに会ったときにこんなことを言っていたよ。自分は、結局他人というものが信じられないんだって。だから僕は言ってやったんだよ。僕は君のことを信じているよって。そうしたら、ユニコーンのやつったら、何か気難しい顔しちゃってさ、君だっていつか僕のことなんか忘れてしまうさ、と言うんだよ。今は確かに僕のことを信じているかもしれないけれど、だんだん時が経って大人になっていくと、自分のことを単なる幻想にすぎないと思うようになるって言うんだ。もちろん、僕はユニコーンのやつに言ってやったさ。たとえ大人になっても、僕は今と変わらず君のことを信じているし、君のことが大好きだって。そして、今と変わらずに夢の中でいっしょに空を飛んだりして遊ぼうってさ。そしたら、ユニコーンのやつたら、急に大声で泣き始めてしまったんだよ。でも、最初、僕はユニコーンが泣いてるなんて思わなかったんだ。なぜかというと、ほら、馬がよくヒヒーンって鳴くだろう？でも、ユニコーンの鳴き声は違って、まるで川がサラサラと流れるような音なんだ。本当にあんなに美しい泣き声はないね。僕は感動して、しばらくその場にたちつくしていたっけ。それから僕は、ユニコーンに近づいて、体をさすってやったんだ。ユニコーンは泣きながら、何度も何度もありがとうって言っていたよ。僕が、礼なんかいらないよ、僕たちはトモダチなんだからって言ったら、ユニコーンはまた大声で泣き始めたんだ。まいったなこりゃ、と思っていると僕は夢から覚めてしまったんだけどね。」

そして、だんだんと私たちの中学校が見えてきた。コンクリートの四角い校舎が不気味にそびえている。私は何だか気味が悪くなって、ぶるぶると震えた。

「一体どこへ行くんだい？」ノボルくんが私に訊ねた。「もうちょっと行ったところにある馬小屋よ。」

ノボルくんは、訳も聞かずに喜んだ。「わーい、やった、やった。ウマに会えるんだね。僕たち、ウマに会いに行くんだね。」

「まあね。」と私はそっけなく言った。「でも、ウマを見たらすぐに帰るわよ。九時になったら、観たいテレビもあるし、彼氏に電話もしなきゃならないし。」

私がそう言うにも関わらず、ノボルくんははしゃいでいた。「わーい、わーい。僕たち、ウマに会いに行くんだ。ウマだ、ウマだ。わははは。」

本当にこの人だいじょうぶかしら、と私はノボルくんを心配した。そもそも危ない人が来たら、この人は本当に私を守ってくれるのかしら。いや、こんな人にはムリだ。はっきりいって私の方が強いに違いない。私はいざとなったら、ノボルくんを見捨てて逃げ去ってしまおう。たぶん、ノボルくんなら相手も気味悪がって攻撃してこないだろう。そうよ、そうしましょう、と私は思っていると、少し離れたところに馬小屋が見えた。古い木造建てのその厩のまわりには、柵がある。私たちは、その柵の前までやってきた。動物特有の強烈な臭さはあっても、ウマはどこにも見あたらなかった。

「本当にいるのかしら。」と私は言った。ノボルくんは、何やら耳を澄ませている。

「あ、何か音が聞こえる」

私は、耳を澄ませてみた。それは、フー、フー、とウマの呼吸している音だった。本当にいるわ、確かにいる、と私は思った。そして、あの夢に出てきた青く輝くユニコーンを思い出した。

「明日の夜八時に中学校のとなりにある馬小屋まで来てごらん。」

私の心臓は、ドクドクと鼓動していた。時計を見ると、もうすぐ八時だ。もしかして、本当にあのユニコーンが私の目の前に現れるかもしれない。私の心臓はさらに激しく鼓動した。すると、ノシノシと藁を踏みつけて、ウマがこちらにやって来る音が聞こえてきた。

ブルブル、プシー。ウマは、そう言って私たちの前に現れた。ところが、それはユニコーンではなかった。それは、私がかつて給食で残したニンジンあげたことのあるごく普通のウマだった

。体はとても細くて、どこか貧乏そうで情けない目をし、耐え切れないほどの悪臭を放っていた。

ブルブル、プシ、プシー。ウマは首を振って、鼻息を荒く吐き出していた。私は失望のあまりがっくりと肩を落として、その場にたちつくした。

「なんだ、やっぱりいなかった。ユニコーンなんていなかったんだ。」私は、そう思えば思うほど、だんだんと腹が立ってきた。

「なんだ、ユニコーンなんているわけじゃない。そんなことを信じていた私がばかだった。こんなことになるのだったら、こんなところに来ないで、テレビでも観て、それから彼氏にでも電話かけておしゃべりしてた方がずっとよかった。」

ノボルくんはそんな貧相なウマに近づいて、頭を撫で回し、「よしよし」とか「そうか。そうか。」とか言って、ウマと仲良くしている。ウマもウマで、たまに現れた客人がよほど嬉しかったらしく、とても興奮していて、鼻息が荒い。そして、とても気に入ったらしいノボルくんを容赦なくベロンベロンに嘗め回している。ウマの唾液でいっぱいになったノボルくんは嫌がりもせずに、じっと嘗め回されるのを耐え、ときどき「フーム。フム。なるほど」とか「そうだったのか。」とか言って相槌を打っている。

「もう行きましょうよ。」と私は言った。「九時まで帰らなきゃ、おもしろい番組を見逃してしまうわ」

ノボルくんはそれでもしばらくの間ウマとじゃれあっていたが、私が睨みつけておどしていることに気がつく、ノボルくんは、あきらめて言った。「もうそろそろ行かなきゃならないよ。」

ウマはペロペロと嘗め回すのをやめて、じっとノボルくんを見つめた。その目は、とても哀しそうな目だった。あれ、どこかで見たことがあるなと私は一瞬思ったが、そんなことにかまっている時間はなかった。

「ほら、早く行くわよ。彼氏に電話もかけなきゃいけないし。とにかく早く、早く行きましょう。」

私はノボルくんの腕を強引に引っぱってその場を離れた。それでも、ウマはじっと私たちの方を見つめていた。私たちは、だんだんとウマの姿が遠のいていく。ブルブル、プシ、プシー。そんな音が聞こえたかと思って、後ろを振り返ってみると、もうウマの姿はどこにも見あたらなかった。

「何であんな臭いウマと仲良くできるのよ。超信じられないわよ、あんた」私は帰りの途中でノボルくんに言った。

「だって、いろいろとおもしろい話をきかせてくれたから。」とノボルくんは言った。「おもしろい話？」

「うん。あのウマが言うには、昨日の夜、自分はユニコーンの夢を見たっていうんだよ。そして、ユニコーンは自分に、今日男の子と女の子がやってくるから、そのときに伝えてほしいことがあると言ったそうだ。そのウマが何を伝えればいいのか訊ねると、ユニコーンは、ただ自分が本当に存在することを信じてほしいって伝えてほしいと言った。あのウマはそれはただの夢だと思っていて、ユニコーンのことももう忘れてしまおうと思っていたが、そんなところに僕たちがやってきたというわけさ。だから、あのウマはあんなに興奮していたんだよ。そして、あんなに鼻息を荒くして、僕たちに、本当にユニコーンは存在するんだ、って語りかけていたというわけさ。」

私は我慢できなくなって言った。「どうしてノボルくんはあのウマと話ができるのよ。できるわけじゃないじゃない。」

「いや、僕にはウマの言うことがなんとなく分かるんだよ。確かに、会話はできないけれど、なんとなく気持ちが分かるんだ。本当だよ。」

「そんなの全部デタラメじゃない。」と私は言った。「ユニコーンのことだって、全部デタラメのウソ話じゃない。だいたい、ノボルくんはもう高校生なのに、非現実的すぎるのよ。もっと現実的になった方がいいわよ。」

「ユニコーンは本当にいるよ。」とノボルくんは言った。「僕はこのまえ、ユニコーンといっしょに空を飛んだんだ。そしてまたいつかいっしょに遊ぶ約束もした。」

「そんなのウソよ。」私は言った。「あのユニコーンは、本当に存在しないわ。私は今日それを確認するために、あんな臭いところまで行ったのよ。そして、この眼で真実を見たわ。本当に存在しているのは、あの貧相なウマころだけよ。」

「ちがうよ。あのウマは、僕たちにユニコーンのことを何度も語りかけていたんだ。僕にはそれがなんとなく分かったんだ。」

「ほら、なんとなく、でしょう。そういうのは、具体的な事実じゃないわ。あなたは感覚的にそう思っているだけ。つまり、あなたの主観でものを言っている。私が言っているのはそこなのよ。もっと現実をよく見なさいよ。」

「本当なんだ。」ノボルくんは、しょげかえってそうつぶやいた。

「あんた、バカじゃないの！！」私はそんなノボルくん到我慢できずに言った。「そうよ。あんた本当にバカよ。いつまでも夢ばかりみてる大バカよ。」

ノボルくんは黙りこみ、そしてしばらくすると、しくしくと泣き始めた。

「どうしたのよ、男の子がそんなことで泣いてどうするの？」私は言った。ノボルくんは、それでも泣き続けた。その声はだんだんと大きくなっていった。

「ねえ、頼むからこんなところで泣かないでよ。」私はそう言って慰めたが、ノボルくんはますます大声でわんわんと泣き続けるのだった。

結局、ノボルくんは家にたどりつくまでずっと泣き続けた。お母さんはそんなノボルくんにやさしく、「おや、どうしたの、ノボル。だれがおまえを泣かせたんだい？」と言って私の方を睨んだ。私はその視線に気づくと、そっと二階へ逃げようとしたが、お母さんに腕を掴まれてしまった。

「どこへ行くの？やっぱり、あなたの仕業ね。ノボルくんに謝りなさい。」お母さんはすごい剣幕で怒っていた。

「どうして私が謝らなければならないのよ。ノボルくんは勝手に泣いているだけだもの。私には関係ないわ。」

「じゃあ、どうしてノボルくんは泣いているの？あなたが何か言ったからじゃないの？」

「それは……。」

「ほら、みなさい。やっぱりあなたが何か言ったから、ノボルは泣いているんじゃない。」

お母さんに問い詰められて、私は黙っていた。すると、ノボルくんは泣きながら言った。

「おばさん、モモコちゃんを叱らないでください。モモコちゃんは悪くありません。」

「だって、おまえが泣いているのはモモコが何かひどいことを言ったからなんだろう？」

お母さんがそう言うと、ノボルくんはまたしくしくと泣きながら必死に首を振った。

「いいんだよ。そんなに泣かなくて。この子の言ったことなんて忘れちまいな。」お母さんはそう言った。そしてまた私を睨みつけた。

「私は何も言ってないわよ。ノボルくんが勝手に泣いているだけだもん。それに、私は別にノボルくんが泣いていても関係ないわ。」

私は必死になって言い訳した。だが、お母さんは私をじっと見つめてから言った。

「あなた、最近どうかしてるわ。」

「どこがよ。私はまともよ。変なのはノボルくんに決まっているじゃない。」

「あなたは自分がまともだと思っているけれど、大事なことを忘れていないの？」

「そんなわけないわよ。」私は必死に反論した。「私が何を忘れてるっていうの？私はただウマを見に行っただけで、それでウマがいたってノボルくんに言っただけじゃない。そしたら、ノボルくんがユニコーンがどうのこうの言うから、そんなのいないって言ってやっただけなのよ。」

お母さんは肩をすくめた。そして私に言った。

「私が今日あなたにウマを見てくることを許したのは、ただウマを見させたかったからじゃないのよ。そこから何かを感じとってほしかったからなの。そりゃあ私だって、そこにいけばただ一頭のウマがいるだけだということは分かっていたわ。だけど、あなたが今朝ユニコーンの話をしたとき、あなたの顔がとっても生き生きと輝いていて楽しそうだった。最近のあなたを見てみると、そんな顔をすることがなかったわ。確かにあなたはだんだんと高校生活にも慣れてきたし、部活も順調にやっているし、おまけに彼氏もできて、うまくやっているように見える。だけど、私はもしかしたら、あなたは大事なことを忘れてるような気がしたのよ。そして、そこに行けば、きっと自分が忘れてることに気づいてくれるって思ったの。」

「大事なことって何よ。」私はぶっきらぼうにそう訊ねた。

「夢みるころよ。」お母さんは真剣な顔でそう言った。

「夢見るころ？」私はせせら笑った。「何言っているのよ。私はもう高校生よ。そんな夢ばかり見てられるほど子供じゃないんだから。」私はお母さんの手を振り切って階段を上がっていった。

「モモコ、モモコ！！」

お母さんがそう叫ぶ声とノボルくんの泣き声が聞こえてきたが、私はかまわずに部屋のドアの鍵を閉め、ベットにもぐりこんだ。

「何よ。お母さんなんか。私のこと、ちっとも信じてくれないんだから。それに、ノボルくんはやっぱり許せない。困ったときには決まって泣きだすんだから。この前だって、私が冷凍庫に入っているノボルくんのアイスクリームを勝手に食べて、私が謝ったのにも関わらず、わんわんと大声で泣きだすんだから、ほんと困っちゃうたらありゃしない。ふん、もうノボルくんなんか相手にしてやらないんだから。もう絶対、絶対、口なんかきいてやらない。ふん。」

いつの間にか私はどこかの大きな遊園地にいた。メリーゴーランドに乗った私は、心地よいメロディーと共にゆったりと上下にゆられていた。なんてステキなのかしら、永遠にこのままだったらいいのに、そう思ってふと前をみると、のっぺりとした髪に、細い体つきをしている男の子が目の前のウマに乗っている。どこかで見たことがある人だなと私は思った。

「あれはノボルくんじゃない！！」私は思わず叫んだ。「あんた、こんなところで何やってるのよ。勝手に人の夢に出てきちゃだめよ。」

「あははは。こりゃあおもしろいや。」私の忠告を無視して、ノボルくんは無邪気にはしゃいでいた。「このまま空まで飛んでいけ！空高く飛んでいけ！」

「こら、ノボルったら、聞ってるの。ダメだって言ってるでしょ。早くどこかへ消えてしまいなさいよ。もうあんたなんかと口なんかきいてやらないだから」私はまた叫んだ。

「あははは。最高だぜ。もっと空高く、空高く飛んでいけ！」ノボルくんはまったく私の言うことを聞いていなかった。

「あんた、何バカなこと言ってるのよ。」私は必死に叫んだ。「それは鉄でできているのよ。本物のウマじゃないのよ。それに、ウマが空を飛べるわけじゃない！！」

私が絶叫すると、メリーゴーランドはぴたりと止まった。あら、もう終わりかしら、と私が思っていたら、ノボルくんの乗っているウマからメキメキという音が聞こえてきた。よく見てみると、ウマの体から大きな白い翼が、額からは銀色の鋭い角が現れていた。

「ウソよ。こんなのウソよ。」私は信じられなくて言った。ところが、ノボルくんの乗っているウマは青く光り輝いてメリーゴーランドを飛び出し、空高く舞い上がったのだった。

「ウソよ。こんなのデタラメよ。」私は今ではもう天空を自由に飛びまわっているウマにむかって叫んだ。

「あははは。こりゃ最高だぜ。行け、ユニコーン！もっともっと空高く飛んでいけ！」ノボルくんは天空からそう叫び続けていた。そして天駆けるユニコーンは信じられないほどのスピードで星から月へ、月から星へと飛びまわっていた。

「信じられない……。でも、本当だったんだわ。あのユニコーンは本当に存在していたんだわ。」私はそう思って、天空へ叫んだ。

「ごめんなさい。私は大事なことを忘れていたわ。あなたたちのことをもっと信じてあげるべきだった。だから、私を許して。許してちょうだい！！」

ノボルくんにはもう私の声が聞こえていないようだった。ノボルくんを乗せたユニコーンはさらに空高く、さらに空高く舞い上がっていった。そして、だんだんと小さくなって、最後には消えてしまった。空にはもう照り輝く月と一面に散らばっている星たちだけが残されていた。

だが、私はそれでも空を見上げていた。いまではもう宇宙の果てまで旅をしているだろう白馬の王子さまを夢見ながら、私はいつまでも空を見上げていた。